



大学教員の委員会活動

梶原 義実（広報体制委員長）

私たち大学教員の仕事としては、「研究」と「教育」がまずあげられますが、とくに国公立大学では、学部や大学の運営や実務にかかわる仕事の多くも、教員が分担しておこなっています。

名古屋大学文学部・人文学研究科では、学部全体の舵取りをする執行部・運営委員会のもとに、授業のカリキュラムの調整をはじめ、教務関係の案件を審議する教務委員会、パンフレットの作成やオープンキャンパスの開催、高校への出前授業の調整等をおこなう広報体制委員会、入試関係の諸業務をおこなう入学試験委員会、図書関係の諸業務や、研究科が発行する論文集の編集をおこなう図書・論集委員会、近年増加している留学生に関する諸業務をおこなう国際交流委員会、学生の進路に関するセミナー開催を担当する進路・就職対策委員会、文学部・人文学研究科ホームページの管理等をおこなう情報メディア委員会、教職課程に関する授業の調整や、受講生への諸指導等をおこなう教職課程委員会など、多くの委員会が設置されています。みなさんの学校での委員会活動に似ていませんか？

このような委員会を通して、私たち教員は、名大文学部を受験し、入学してくる学生さんたちに安心して充実した学びの場を提供できるよう、さまざまな問題について、自分たちの手で考え、決めていっているのです。

広報体制委員会が高校生向けに発行しているこの「月刊名大文学部」も、2009年に創刊されてから10年間、東洋史学の林先生、インド哲学の畝部先生、フランス文学の加藤先生と、数々の教員に引き継がれ、教員自身の手によって編集・刊行されています。高校生のみなさんに、名大文学部がどのようなところかを伝えたいという教員の熱い思いが、もうすぐ記念すべき100号を迎えようとする「月刊名大文学部」には込められています。

（写真の名大文学部・人文学研究科のパンフレットも、広報体制委員会で編集・刊行されています。）



分野・専門紹介—File32

比較社会文化論（国際地域共生促進コース）—世界を“多角的”な目で見ると—

分野・専門名：文化動態学

皆さんは、フィリピンにおける「アスワン」をめぐる怪談話を知っていますか。16世紀末の記述によれば「アスワン」とは、空を飛び、人間を殺し、その肉を食べる邪術師と同義だといわれます。しかし、17世紀に至ると、その記述は変わり、「アスワン」は鳥で、邪術師の仲介者だという主張もありました。更に1990年代においては、その説はより多様になり、「アスワン」の正体は一体何なのかをめぐる議論が盛り上がってきました。

このような問いから出発して研究をすれば、「フィールドワーク」、つまり「現地調査」という方法が取られます。調査を進めていく過程で、現地では、アスワンの故郷はカピスだとその存在を確信している人もいれば、逆にカピスにはアスワンはいないと思う人もいるという予想外のことが発見されました。なぜこのような違いがあるか、また新たな疑問が出てきます。調査の進行に従って、それは1990年代後半の頃、当地

の住民たちは、メディアと政府が観光事業を推進する目的で打ち出した政策によって影響されたことと関連しています。

一つの関心のある問題から調査を展開していき、その中で新しい発見が生まれ、より広い分野に入り込んでいくと、ある地域・社会・文化をより一層深く知る事ができるのは、まさに研究の意義、研究の魅力だと「比較社会文化論」という授業を通して私は思いました。



この授業は、それぞれ異なった専門分野や対象地域に基づく研究をしている先生方が、オムニバス形式で開講するものです。フィリピンのみならず、世界各地域が多様な局面から講じられます。無論、受講していろいろな基礎理論や研究方法を学びますが、一方、教えられたものを踏まえて自分なりの発想ができるのはすごく意味あることだと思います。それから、インタビューやグループ議論、映画鑑賞、資料解読分析など授業の形式が豊富で楽しめます。(楊 珺・博士前期課程1年)

歴史を学ぶということ

分野・専門名：日本史学

「文学部です」と言ってまず訊かれるのが、「本とか読むの?」ということ。文学部は英語で"School of Letters"。直訳で「文字の学部」といったところでしょうか。であれば、実際その問いかけは間違いではないように思います。日本史学は、現代までに遺された文字資料——いわゆる古文書と呼ばれる類のものだけでなく、新聞や碑文といった全ての史料から、その時代の人々・社会の姿を読み取り、それらがいかに後の世に影響を与えうるのかを考えていく学問です。

具体的に授業では、大学相当の日本史を学ぶための基礎講義だけでなく、実際に史料を読みながら当時の社会の復元を試みる史料読解や、先人の論文から研究史を学ぶ論文演習を行います。

わたしが現在受講している演習では、古代の寺院造営関係の史料を読みつつ、当時の法制や行政についての考察を深める、ということをやっています。字面では堅苦しく見えますが、実際に史料を読み解く作業の中では、その時代の人々のいとなみが生き活きと再現され、非常に興味深いものとなっていきます。

では、このように日本史を学ぶ意義とは何なのでしょう。

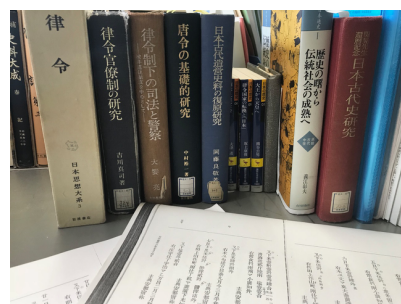
「もう百年も経ちましたら、私たちが今日まで苦しんで来たことで、何一つ無駄になつたものゝ無かつたことを、積極的に證して呉れるやうな時代も来るだらうと思ひます」

これは、1920年に『日本及日本人』という雑誌で、2020年の日本について語った島崎藤村の言葉です。この言葉のように、過去の人々が苦しみ、体験したことの軌跡を学び、それが意義のあるものであったと証明し、より良い日本を創るための指標とすることが日本史を学ぶ意義なのだ、私は思います。

*名大文学部の現在の英語正式名称は School of Humanities (編集部)。

(花野 志帆・博士前期課程1年)

分野・専門紹介—File33



最近の文学部

勉学の秋…学会シーズンです！

教員の業務の一つの「研究」も秋が繁忙期。名大文学部でも学会・国際集会・講演会がいくつも開かれ、今、玄関や廊下は色とりどりの案内ポスターで賑やかです。一般公開のものもありますので、機会があれば覗いてください。(YK記)

*本紙では、名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが、それまで待てない人は... 名大文学部のWEBサイト <https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/> まで(『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります)